

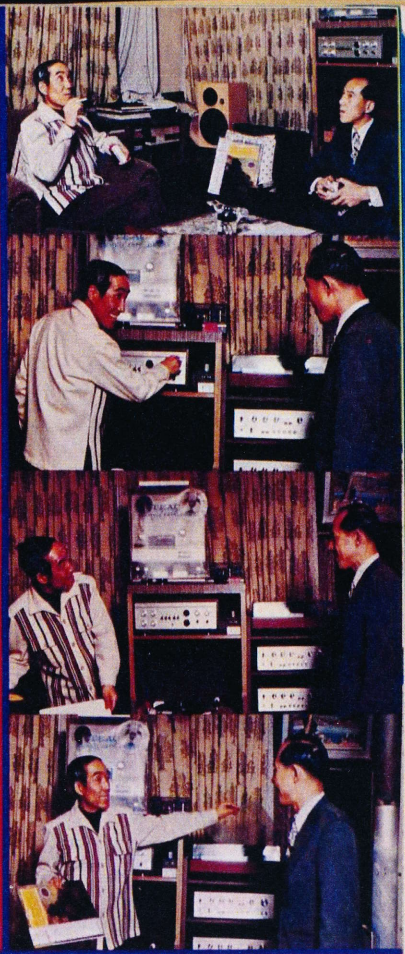
連載

音楽と音と再生装置と……

⑩ 大木正興氏を訪ねて

若林駿介





「音楽と音と再生装置と……」も、回を重ねて、その第十回目となる。今月号は、大木正典氏をおたすねした。

大木氏といえば、本誌の新譜月評で長い間室内楽曲を担当し、今年から交響曲へと村田武雄氏からバトン・タッチされ、また、新聞などでも演奏会評を担当されているので、読者のみなさんにもすでによくおなじみのことと思う。その外、NHKテレビの木曜日の夜の「コンサート・ホール」でも毎週解説を担当していらっしゃるの、音楽ファンの間でも御存知の方も多いことと思う。

さて、再生装置の方は、スピーカー・システムとして三菱の2S-305、これをラックスの真空管アンプCL-35 II、及びMQ60カスコンドライヴ・レコード・プレーヤーは、デンオン・D-3000、プラスFRのFR54、これにカートリッジがFR-5、デンオンDL-103とオルトフォンのSPUGなどを差しかえてセットして使われている。この外、テーブ・レコーダーにはティアックのA-7030が用意され、4チャンネル用には、まったく別セットのコンポネルントとして、ビクターのJLB44プレーヤー、JAN-55アンプ、SX-3スピーカー・システムが組みあわされ、デコーダーにはCD-4用としてビクターのCD4-10とマトリックス用としてソニーのSQD-2020がそれぞれセットされている。



東京駅の最近使われた地下ホームから総武線直通の快速電車に乗って二十分足らず、市川駅で下車し、バスで二、三の駅をバスすると、そこはいわゆる市川の住宅街である。私も今から十年以上前になるかと思うが、二度氏のお宅をお訪ねしたことがある。当時からくらべるとなんとその交通が便利になったものが、衛生都市の「市川」は、今や千葉県でありながら、東京の郊外という感じである。

も高いところである。でも、この天井の復元だけはどうしてもできないんです。昔風のいろいろな装飾が壁の中にできたりしてしまっている。それを今復元する職人がいないんです。直すとき大工さんが、どうしてもこの上は直さないと、いって、今のこの低い天井にしようとしています。

「広さはどれくらいですか。大木 奥のレコード庫を除いて、こちらの部分だけで十八畳くらいあるんじゃないかと思うんです。というところは理想的なリスニング・ルームですね。毎月の新譜レコードは、この部屋で聴きになるんです。」

「んがです。何やら、この部屋にアンプなんかを高く積み重ねてしまっている。でも機械の方はあまり好きではないんですが、とにかく私の耳だけでやってみよう。そうしたら、ご覧のようにアンプは真実管式のものでした。」

先生は、不運にも大事にあわれしました。もう何年前になりますか。大木 六、七年前になります。もう、機械もレコードも全部壊れたのでした。

「でも、リスニング・ルームとしては今は二度いじりたくないですか。もつとも昔のままで、天井が高ければ、室内楽を演奏するのにはよかったです。」

「私は同じ放送局に勤務していた。私はミクサーとして、また氏はクラシック・プログラムのプロデューサーとして、またレコード・ライブラリーの責任者として活躍されていたものであります。」

「石のアンプはおかしい音がする。石は何かおしつけがましい音になります。石の音というのは、音が消えるように消えるような感じがするんです。つまり音の断面ばかりがみえるようです。演奏会などの音なのに、音がすーっとなくなってしまうんです。」

大木 ええ、いわゆる昔の西洋館ですね。それを建て直したわけですか。ですから本当は天井がこれより1メートル50センチ

「ちょうど一種の共鳴体になっているんじゃないか。それが適当に響くのだと思えます。」

「大木 ええ、もう随分前になりますね。LPレコードが出始めたばかりの頃でした。それを聴かなければならないのになったときに、何しろ若林さんに一番先に相談したわけです。」

「大木 ええ、もう随分前になりますね。LPレコードが出始めたばかりの頃でした。それを聴かなければならないのになったときに、何しろ若林さんに一番先に相談したわけです。」

大木 ええ、いわゆる昔の西洋館ですね。それを建て直したわけですか。ですから本当は天井がこれより1メートル50センチ

「大木 ええ、もう随分前になりますね。LPレコードが出始めたばかりの頃でした。それを聴かなければならないのになったときに、何しろ若林さんに一番先に相談したわけです。」

「大木 ええ、もう随分前になりますね。LPレコードが出始めたばかりの頃でした。それを聴かなければならないのになったときに、何しろ若林さんに一番先に相談したわけです。」

「大木 ええ、もう随分前になりますね。LPレコードが出始めたばかりの頃でした。それを聴かなければならないのになったときに、何しろ若林さんに一番先に相談したわけです。」

それはありますね。傾向の違ったス
ピーカーの音を聴くと最初わかれでも
とまいますね。
大木 そうなんです。そうやたらと、こ
ちらの耳をとりかえるわけにいきません
からね。笑。
ところで、先生は生の演奏会にもよ
くいらして演奏会評を書いてられるし、
レコード評もなさっていらっしゃるん
です。生の演奏会というが、音楽とレコ
ードの関連とか接点なんかについてはい
かがでしよう。

大木 僕はレコードを批評する立場とし
て、それが現実に録音される時に、現
場でどんな音がしているんだろう、どん
な表情をして演奏しているんだろう、な
んていうことがひびく気になります。
つまり、あくまでも、そこに届けられ
たもののでもなくて、そこに入られて
いる材料が、実態がどんなものである
かということなどがとても気になるわけ
です。これは、僕がレコード評をやつて
いると同時に生の演奏会を毎日のように
聴けずまわっている立場にいるせいだ
らうと思います。

生の演奏会あつてのレコード音楽と
いうことですね。

大木 たとえば、これは音楽の例ではあ
りませんが、ここにロマンの風景がある
とします。そして、このロマンの風景を
一か所でもいかに詳しく見たいと見
たいとある人、ロマンの十ヶ所の絵巻書
を出されても、ほぼその雰囲気がある
わけですね。

肌で感ずるということですね。
大木 そうそう、それは、一か所も見た

このない人とは全然感じ方が違つて
くる。

やはり生の演奏会を聴いて、レコ
ードを聴くというのが、正しい姿であるわ
けですね。
大木 そうですね。それはある程度生が



自由自在に聴けるという状態がで
きないところじや、たとえば地方にお住みの方
すべての人にそういうことをして下さ
いといつても無理だと思ひますが、やつ
ぱり、そういう方向に進んでいった方が、
日本の音楽界にとつてもしあわせなよう
な気がするんです。

ますね。指揮者もそうですし、
オペラなどもそうでしょう。
……と、放送の現場の経験の長い氏は、
放送というものの一回性、レコードや
テープなどの反復記録芸術、さらに聴
感覚と視覚と、いろいろなメディア
についてきちんと整理し、それぞれ区



別して見たり聴いたりしてられる。
見るといふこと、聴くといふことは
この辺にして、レコードに話をもどしま
すが、例の4チャンネル・ステレオにつ
いては……
大木 実はね、これについてはさまざま

——レコード・ファン、オーディオ・フ
アンよ、生を聴けといふことは、首身
からみても私もまったく同意です。
大木 それと、レコードというのは、生
とはまったく違った楽しさがあります
ね。今度発売されたヨッフム指揮/ボス
トン交響楽団のモーツァルトの「ジュベ
ター」とシヨベルの「未完成」のレ
コード(他ヨッフム指揮 253035
7、このジャケッット裏に、こうした録音
風景の写しが載っていますね。こういう
のが私好きなんです。その音楽の現場を
空想させてくれるんですよ。
なるほど。こういう楽しみは、生の
演奏会ではありえない……

大木 ボストン交響楽団の楽員たち、こ
れはアメリカ人できわめてラフなシャツ
を着ている。指揮台のヨッフムの方は、
ドイツからジグミといふ着を着て、ま
よれの洋服といふが仕事着を着て立っ
ていますね。それで指揮者とオーケス
トラとの間にどんな心理状態がであ
っているかということが空想できるでし
ょう。針先から出てくる音楽との関連を
考えたりすると実に楽しいですよ。
それが、各人各様に空想される。

大木 ええ、そうなんです。例えば若林
さんなんかの場合は、この録音を担当し
たミスターがどういふ想像をもつて仕事
を進めているかなどを想像もつてしま
う。
なるほど。ところで、先生は毎週木
曜日の晩、NHKテレビで解説をやつて
いらつしやいますか……
大木 ええ、あれは今年で九年目になり

な意見がある。一つは、私個人として
は、その方向を開発することは賛成なん
です。もちろん、今の段階では満足でき
ないんですけど、いふのはね、われわ
れは演奏会に行つても、お客さんは喉を
潤し、紙をめくる音はするし、それが
ら反響はあるだろうし、鳴っている音楽
以外にさまざまな音があるでしよう。
それから、オーケストラがゴーツと鳴
っているときだって、作曲者はそこでフ
ルートの旋律を目立たせようと思つて書
いているかもしれないけど、われわれは
フルートの音を聴かないでヴァイオリン
を聴いているかもしれない。つまり、わ
れわれが音楽に集中していくときは、要
らないものをどんどん排除しながら、自
分の目指すものをとらえるべく努力し
ていると思うんです。それが豊富であら
ばあるほどわれわれは集中力が強くな
ります。そして、集中力がつよくなつてハ
ツと驚くときに何か自分がそこに一点を
見定めて聴いているわけですね。そのと
きにほかのものは全部なくていいのか
いふと、そうじゃなくて、そういう聞
れた中からあるものを選んでいこうとす
る。

そうなんだときに4チャンネルにな
つていて情報量がふえていけば……
大木 そうなんです。情報量がふけ
れば多いほどいいわけですね。
ただ、現段階では、システムにして
もレコードにしても、情報量が……
大木 そう、多いとも思いませんね。
それと、その情報のきかたがまだ……
自然でないとか。
大木 いかににも未熟な感じがするんです。

ます。それで音楽自身は録音のことが多
いんですが、私の解説はほとんど生放送
なんです。
毎週レギュラーで生放送となると大
変でしょう。
大木 そうなんです。ですからコンディ
ションをつまづ持つていかに健康管
理がむづかしいんです。それで、音楽
が録音されている場合でも、今夜の演奏会
を、その同じ晩の十時過ぎから放送する
つまり追いつけ放送といふのが一番つ
ります。

演奏会が終わつてから放送まで時間が
たっぷりないでしようし、演奏時間のタイ
ミングなどもなかなか決まらないでし
ようから、気分的にもお疲れでしょうね。
それで、今やテレビが完全に家庭に入
り込んでいますし、最近ではレコードのよ
うな耳だけのものから視覚を伴つたヴィ
デオ産業へと発展するキザシもみえてき
ています。そういうことから、音楽プロ
グラムの視覚化、つまりテレビの音楽番
組とか、ヴァイデオ、テープとかヴァイデ
オ・デスクによる音楽など、これらにつ
いてはどうお考えですか。
大木 私は断片的には、音だけのレコー
ドよりも視覚が入つたテレビなどの方が
いいと思います。ただし、これは条件づ
きで、繰り返してみないと限つた場合で
す。あそこいけばあつたという画面にな
るといふことを覚えるやつたものも駄目
ですね。

——ということでは、家庭のヴァイデオ・テ
ープには賛成できないけど、テレビ放送
ならばよいということですね。
大木 ええ、それを何回も同じ場面をみ

それとレコードについては、普通の2チ
ャンネルのステレオより演奏会に近い感
じのものもありますが、反対に全然音楽に恋
のい、ほやけちやつたと思うのがあ
るのが残念です。
ありますね。ステレオのひろがり感
は出ないけど、楽器に明瞭度がなく粒
が立たない。
大木 ええ、ちょうどクラゲが水の中
で泳いでいるような感じで、音楽になつて
いない。(笑)

ジャンルの中ではどうですか。
大木 僕、偶然ですけど、この一月号が
らシフオニの月評を担当しているで
しやう。よく聴いてみると、やはりオ
ケストラものに4チャンネルの将来性
があるような気がしますね。
これは特殊な4チャンネル録音に対
して演出したのですが、CBS・ソニ
ーからSQ4チャンネルで発売された岡
のブレイズのバルトーク「管弦楽のた
の曲奏曲」あれなんかいかがでしやう。
大木 うしろからも楽器を鳴らすやつ
でしやう。いいですね。とてもおもしろ
く聴きました。
……と、氏は一見保守的な感じを受け
るが、メカニズムの新しい発展につい
ても積極的に入つていこうとする面も
お持ちであるし、またそれらについて
かなり理解なさつていてと見受けられ
た。

今回のインタビューは夕方から行な
われたものでしたが、つい話はず
み、外へ出たときは、夜も大分ふけ、
こ市川の住宅街も大変静かに静え
たつていた。